

月刊

いじろのとも

第十四卷

三月号

執らわれ深まる現代人

業しらず

業に苦しみ

業に死す

業せおう人

業ふかき人

自らに

執らわれまくる

現代人

苦悩ますます

深まりて行く

信なくば

無明の闇を

さまよいて

善きと置いて

悪しきを為せり

お布施する慣習作れ

お布施する

慣習作ろう

日本に

己を捨てて

幸せつかもう

人生を考え直して

みたい人は(一一〇)

空海『即身成仏義』解説(一三)

(一四) 3 六大の能造・所造

故に、次にまた言く、

「秘密主、曼荼羅の聖尊の分位と種子と 幟(ひよ
うじ)とを造すること有り。汝、当(まさ)に諦
(あき)らかに聴くべし。吾(われ)、今演説せ
ん。即ち偈を説いて給(のたま)わく、

真言者円壇を

まず自体に置け

足より臍に至るまで

大金剛輪を成じ

此れより心に至るまで

当に水輪を思惟すべし

水輪の上に火輪あり

火輪の上に風輪あり」と

謂く、金剛輪とは阿字なり。阿字は即ち地なり。水
・火・風は文の如く知んぬべし。円壇とは空なり。
真言者とは心大なり。長行(じょうごう)の中に謂
う所の聖尊とは、大身なり。種子とは法身なり。

幟とは三昧耶身なり。羯磨身は、三身各各に之を
具す。具(つぶさ)に説くことは、經文に広く之を
説けり。文に臨んで知んぬべし。

* (ひよう)は、「巾へんに票」

このところ毎回、現代語訳というよりも、解説文に近
い訳を、金岡秀友訳・解説『空海即身成仏義』(太陽出
版刊)から引用させて頂いていますが、今回もそこから
引用させて頂きます。

* * * * *

前の部分で、「六大」からすべてのものごとが生ずる
ことを説明しましたので、この『大日経』からの引用文
には、続いてまた、次のように述べられています。

「『秘密主よ、弟子を導いて真言密教を伝授するため
に、真言の教授者(阿闍梨)が土地を選び、壇を造立し
て曼荼羅を描こうとするならば、その曼荼羅に描かれる
色々な仏たち(聖尊)の位置(分位)と、仏を象徴する
梵字(種子(しゅじ))と、仏を象徴する種々の品物

(幟)とを図に示すのであるが、それについて特に注
意すべきことがある。あなたは、確かにはつきりと聴き
取らなくてはならない。私がいま、ひろく説き明かすで
あろう。』すなわち、大日如来が偈文にして、聴衆の
主位である金剛薩(こんごうさつ)・秘密主)に対し

て説かれることには、『真言行者は、曼荼羅（円壇）を
まずはじめに自分のからだで考えてみよ。足から臍まで
は金剛のように強くて、壊れることのない座（大金剛輪）
を思念し、臍から心（むね）までは水大（水輪）を思惟
せよ。水大の上に火大（火輪）があり、火大の上に風大
（風輪）があると、実感せよ。』と。（『大日経』巻五、
秘密曼荼羅品第十一）

* は土へんに垂

この経文について説明しますと、これは自分のからだ
に五字五大を観じて、法身を自身に実証してから曼荼羅
をつくらねばならないことを述べた部分ですが、臍下
（さいか）の「金剛輪」とは、阿字を指し、すなわち
「六大」のうちの地大を指します。「水」「火」「風」は、
この経文に書かれている通りに理解して下さい。
「円壇」とは、「六大」のうちの、空大であり、「真言
者」とは、心大、すなわち識大を指します。

偈文の前の長い文章（長行）にいわれている「聖尊」
とは、大曼荼羅身の仏身（大身）です。「種子（しゆ
じ）」とは、法曼荼羅の仏身（法身）です。「幟」と
は、三昧耶曼荼羅の仏身（三昧耶身）です。羯磨曼荼羅
の仏身（羯磨身）とは、いま述べた大身・法身・三昧耶
身の三身それぞれにそなわっています。

このようにこれは、「六大」そのものが、「四種曼荼

羅」を生ずるという内容の文章であると解釈できます。
もっと詳しいことは、経文にひろく説かれていますので、
文章を直接読んで理解してください。

* * * * *

このところ、解釈がいるような、それほど難しい文は
ないように思われます。ですから、解説的な現代語訳を
読んで頂きますと、大体、ご理解いただけるのではない
かと思えます。

現代語訳に、「これは自分のからだに五字五大を観じ
て、法身を自身に実証してから曼荼羅をつくらねばなら
ない」とあるところを、これも前出の本からの引用です
が、図示してみたいと思います。

ここで、大切なことは、図のように観想することで、
即身成仏に達する助けとすることなのです。

円壇置自体（曼荼羅）の

図

このように、自分自身を六
大に観立てることを「五字嚴
身感（ごじごんじんかん）」
または、「五輪成身觀（ごり
んじょうしんかん）」と呼び
ます。実際に、このように、
観想するところが、念誦次第
の中にあります。

自作詩短歌等選

万引き少年の死

古書店の店長が
万引き少年を見つけ
警察に通報
逃げる少年を
パトカーが追った
降りた遮断機を
くぐって逃げた少年が
列車にはねられ死亡

その後店長へ
電話やファックスで
「人殺し」という
非難がどんどん来た
店長は一度は
閉店を決意したほど
(後に取り消したが)
日本人よ
どこまで
狂って行くのか

他者の命の手段化

自殺の道連れに
多数の人を殺す
殺してみたいから
行きずりの他人を殺す
死刑になりたいから
エリートの子供を
多数殺す
いま
よくおこる殺人事件
まったく関わりのない
他人の命を
手段にして奪う

原理・原則を欠く首相

小泉首相は言う
同じ自民党の中でも
色々意見があつて
なかなかまとまり難い
例えば
午前の会議では
同意があつていても
午後の別の会議では
反発しあう
それぞれの問題で
意見が互いに異なり
まとまり難いのは
民主政治では
当たり前なのだ
この発言にこそ
現代日本が陥っている
政治的な混迷の
原因がある
政治家だけでなく
日本人全体が
アクシオムや
(「原理・原則」)
バックボーンを失い
根無し草になって
個々の問題ごとに
意見が異なるのだ
これぞ離合集散政治
そのものぞ

子育てを嫌がる母

自殺大国の抗うつ剤販売

アメリカでは
ハッピードラッグと
呼ばれる抗うつ剤が
家庭常備薬になるほど
売れている

日本でも

需要が見込まれるので

アメリカの

製薬会社が

日本での販売申請を

計画しているという

なにせ年間三万人を出す

自殺大国日本なのだから

女生徒の性交渉勧誘

子育ては
息がつまると
言う女性
増える日本
未来は暗い

アメリカ凋落の指標

キリスト教的な
寛容の精神で
統合を保ってきた
アメリカから
だんだんと
寛容が
失われてきている
という
これも
アメリカ凋落の
一つの指標

少女の携帯電話禁止

摘発した児童売春の
約九割が

出会い系サイトによる

少女からの

勧誘だという

だから

これを防止するため

十八歳未満の少女には

携帯電話を

禁止する法律を

制定するという

まず

大人自身が

不邪淫戒を

守ったらどうですか

そうすれば

一挙兩得で

エイズすらも

消えていくだろうに

自作随筆選

韓国特派員の印象

二月九日付けの朝日新聞に、東亞日報という韓国の新聞の東京特派員である李英伊（イ・ヨンイ）という方が、「『神の国』 自信喪失で変化の兆し」と題する記事を投稿していました。

その出だしは次のような文章で始まっています。「三年間の任期を終え、帰国することになった。私の日本滞在のキーワードは、森喜朗元首相が言った『神の国』だった。彼は00年5月に神道政治連盟国会議員懇談会で『日本は天皇を中心としている神の国』と語った。おかげで私は『神の国』の特派員になった。」

これを読みますと、日本人の意識が、どれほど神や天皇に向いているのが、韓国の人たちにはとても気にかかっているように思えます。余談ですが、自民党森派に属する現在の首相も、相変わらず、いや、ますます執拗に、天皇の為に戦死した人たちを祀っている靖国神社に、総理大臣の肩書で参拝しています。このことも、とても気になっているに違いありません。なのに、総理は参拝

をやめるどころか、一層、参拝への固執を強めているような行動をとるのは何故なのでしょうか。

さて、本題ですが、この方のバブル崩壊前の日本に対する印象は、歴代の特派員と同様、とても良かったようです。次にように書かれています。

「日本人からは当初、おとなしく、礼儀正しい、親切で迷惑をかけない、黙々と自分の仕事に励む、といった印象を受けた。初めてのコラム『変わらない日本』で、『そんな日本がうらやましい』と書いた。・・・数多い屈曲を経て変化が激しい韓国は、とても付いていけないように見えた。」

ところが、この日本にもバブル崩壊後変化の兆しが現れてきた、と次のように書かれています。

「社会がギスギスし、企業不祥事も増えた。内部告発も相次ぐ。親切だったタクシーも優しくなくなり、電車では席取りに肩をぶつけ合う。誰もが自分のことで精いっぱい。・・・昨年のサッカー・ワールドカップがきっかけで、情報通信など韓国経済の発展ぶりを持ち上げる報道が急増しているが、私はかえって、日本の自信喪失の断面を見る思いがしている。」

さて、この前半の指摘は、私もその通りだと思えます。しかし、後半の「韓国経済の発展を持ち上げる報道」は、

「日本の自信喪失の断面」を示すものではありません。日本人は「自信喪失」どころか、「自信過剰」になっているのです。喪失していませんのは、自信なのではありません。こんな言葉はありませんが、それは、「他信」なのです。

いま、日本人は、「自己」を肥大させ、「他己」を萎縮させることで、自分だけを信じ、他者を信じることができなくなっているのです。なぜ、そうなってしまったのでしょうか。

私を信じ、本誌を熱心にお読みの方には、ご理解いただけると思うのですが、それは、自己追求の原理しか持たない民主主義制度・教育にあるのです。その欠陥を補うものは、宗教・信仰なのですが、残念ながら、日本は、太平洋戦争に敗れて、公的教育から、完全に宗教教育を否定させられました。そして、それ以後六十年近くが経過としていますが、未だに回復していません。いま、その負の成果が如実に現れてきているのです。ですから、日本人は、殆ど完全と言えるほど「他己」が機能しなくなっているのです。

あの聖女と言われたマザー・テレサは、亡くなる少し前、日本を訪れましたが、離日に際して、日本は生活は豊かだが、こころが貧しいと言いました。それは、

私の言葉で言いますと、日本人に他己が欠けていることを表現しているのです。

では、このように日本人は他己が萎縮し、自信に満ちている（自信過剰に陥っている）はずなのに、なぜ「韓国経済の発展を持ち上げる報道」をするのか、ということになります。

それは、自己肥大（他己萎縮）した人の特徴的行動である、他者より優れたたいとする「優越欲」の肥大によるのです。

自己肥大した人は、他者（他国）と情動の共有（他者の喜びを我が喜びとし、他者の悲しみを我が悲しみとすること）ができませんので、他者の繁栄を素直に、自分の喜びとすることはできません。常に他者との比較（優越）にのみ自分の安心を得ようとするのです。ですから、他者の繁栄は、自己の腹立ちとなるのです。それは、一般的な言葉で言いますと、妬（ねた）みとなります。

「韓国経済の発展を持ち上げる報道」は、実は、その裏返しなのです。「韓国はあれほど経済が発展している。我々日本人も、もっと頑張らなければ」と日本人の妬み根性に訴えようとしているのです。それによって、日本人の不安を解消しようとしているのです。自己肥大・他己萎縮した人は、実は、社会に定位置きませんので、矛

盾しているようですが、自信過剰なのに（だからこそと
言うべき）、極めて不安傾向は強いのです。その不安を
解消しようとして、他者に優越しようとする欲求を満足
させたがっているのです。また、満足させたがっている
のは、優越欲だけではありません。三大欲望である性欲
や食欲も、言うまでもありません。それは、日本人のグ
ルメ狂いや、性の享楽傾向をみれば、明らかです。
さて、この韓国記者の方の最後の結論的な部分を引用
したいと思います。

「メンツや他人の目を気にするより、自分が何をした
いかを真剣に考える人が増えだした。もつと『利己的』
になるべきだ。葛藤や試行錯誤があっても、個人が自分
の欲求や利益のために頑張れば、日本の活力は復活する
と信じる。」

これは、驚きです。

まず、「メンツや他人の目を気にするより、自分が何
をしたいかを真剣に考える」べきだ、とおっしゃってい
ますが、なるほど、いま日本人は、この方が言われる通
り、他者の目をとても気にしています。

それは、実は、自分が社会に定位できていないので、
他者の支えや承認だけが、欲しいからなのです。この逆
に、他者に何かをさせて頂こうと思って他者のことを気

にかけているわけではないのです。

ですから、「自分が何をしたいかを真剣に考える」と
なりますと、当然、他者に対してではなくて、自分自身
が、得になるには何かしたいかを考えることになります。

それが、この次に出てきます「もつと『利己的』にな
るべきだ。」ということなのです。それは、最後にあり
ますように、「個人が自分の欲求や利益のために頑張れ
ば『よい、ということなのです。』

このように、この特派員の方が言われることは、実は、
もう日本では蔓延していることで、いまさら言わなくて
も、そうなっていることなのです。

日本にとつては、この方の言われる事とは逆に、「自
分の欲求や利益（選り好みと損得）」を離れて、他者の
欲求と利益に基づいて行動すべきなのです。

おそらく韓国は、日本の後を追って、だんだんと、自
己社会化が進んでいるのだと思います。この方の書かれ
ましたように「個人が自分の欲求や利益のために頑張
るようになってきているのだと思うのです。

民主主義は、徐々に世界から真の宗教・信仰を失わせ
ています。

日本の、いな世界の人々が、活力を取り戻すには、真
の宗教・信仰を取り戻す以外にはないのです。

釈尊のつとば（一一一〇）

法句経解説

（三七〇）五つ（の束縛）を断て。五つ（の束縛）を捨てよ。さらに五つ（のはたらき）を修めよ。五つの執着を超えた修行僧は、（激流を渡った者）とよばれる。

この偈に言う、初めの1「五つ（の束縛）」と、二番目の2「五つ（の束縛）」が何を意味するのか、また、3「五つ（のはたらき）」や4「五つの執着」が何を意味するのか、私には、よく分かりませんでした。

そこで、テキストにしています本の（中村元）訳注を見てみましたら、そこに結構、詳しく書かれていました。以下、要点を補足・解説したり、引用したりしながら紹介していきます。

初めの1「五つの束縛」とは、「欲界に属する五つの煩惱」のことだということです。

欲界は、三界（さんがい）の最下層のことで、この上に、色界、無色界があります。

ところで、三界とは、仏教の世界観で、輪廻する生きもの（有情・衆生）が住み、往来する世界の全体を言い

ます。

その欲界は、具体的には、淫欲と食欲の二つの欲望をもつ生きものが済む領域で、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天の六道を含んでいます。また、色界は、物質的な制約は残るが、淫欲と食欲をはなれた生きものの住むところです。さらに、無色界は、物質的制約をもはなれた高度に精神的な心境に達した人の住む世界です。

次に、断つべき「五つの煩惱」ですが、それは、貪（とん）、瞋恚（しんに）、有身見（うしんけん）、戒禁取見（かいじんじゅけん）、疑（ぎ）、の五つです。とは、三毒の貪・瞋・癡（とんじんち）の前の二つです。貪はむさぼりのところ、瞋恚は、いかりのところ です。

有身見（うしんけん）は、自分の身体や我が有るとして執着すること、戒禁取見（かいじんじゅけん）は、誤った戒律や禁制を正しい方法であると執着すること、疑（ぎ）は、仏の教えを疑うことです。

こうした五つの煩惱を断つとき、人は、欲界を輪廻しなくてもよくなる、とされています。

次に、二番目の2「五つの束縛」ですが、これは訳注によりますと、「色界と無色界に属する五つの煩惱」のことだということです。具体的には、色界における貪、

無色界における 貪、掉拳(じょうこ)、慢(まん)、無明、です。

貪は、前述の通りです。掉拳(じょうこ)は、こころが軽躁なこと、あるいは、こころが浮動して静まりのないことです。慢は、他人に対してこころが高ぶること、もつと言いますと、おのれは他人よりすぐれていると妄想して、他人に対して誇りたがるこころのおごりです。私の言葉で言いますと、「優越欲」を満足させようとするところです。無明は、無知のことで、私たちの存在の根底にある根本的無知のことです。その無明の闇をはらすことが、ソクラテスで言えば「無知の知」ですし、老子で言えば、「無為而無不為」なのです。私の理論で言いますと、無意識での自己と他己の統合です。こうした五つの煩惱を捨てるとき、人は、全ての輪廻を解脱して、阿羅漢果(あらかんか)を得る、つまり、仏教の最高のさとりに達する、とされているのです。次に、3「五つのはたらき」ですが、訳注には、次のようにあります。「五根。さとりを得させるための五つの力または可能性をいう。すなわち信と精進(勤)と念と定と慧とである。これらは諸の善いことを生ぜしめる根本であるから『五根』と名づける。」と。

ここで、「諸の善いことを生ぜしめる根本である」と

される五根のスタートラインに位置づけられる「信」について少し検討しておきたいと思えます。なぜなら、慢のところでも触れましたように、善いことも他人に対してのことなのですが、現在では、多くの人にとつて「善いことは自分に都合の善いこと」に成り下がってしまったのです。つまり、現代社会から、真に善いことが消えて、悪いことばかりが目立ち、社会が崩壊の危機に瀕しているのです。ですから、実は、信を取り戻すことが、現代社会のもつとも緊急を要する課題になっているのです。

さて、この信は、勿論、基本的には、信仰のことを指しています。でも、前述のように、昔と違い、現代のようにはあらゆる人から信仰が失われて来ていますので、信をどう取り戻せるのが、いずれ大問題になってくると思ふのです。そのためには、信とは何なのかを、もつと明確にしておかなければならないように思います。

老子は第二十一章で信に触れています。私は、その解説をしています。そこでは、真の信は、自己と他己が統合されたとき十全に働くことができるものと捉えられています。

ですから、信とは、自己肥大し、他己萎縮して、自己と他己の統合が取れない人には、どんなにそれが「善い

ことをする根本である」と説いてみても、あたまで理解するだけで、ほとんど効果がないことが分かります。

信仰を取り戻すには、今の教育が目指していますような「あたま」ではなくて、まず、他己を育てることが不可欠だということになります。では、他己は、どうすれば育つのでしょうか。決定的に言えますのは、他己が育つた人と接することです。それは、もうこの世を去った過去の人でも、その著書を通じて接することも含まれます。また、他己が育つためには、もう一つの条件として、何らかの「苦」の体験がいります。

現代のように、経済的に豊かになって、自己肥大・他己萎縮が進行しますと、人々の最高の苦は、他者とこころを通わすことができない苦だと思えます。それは、人間の本質に属するからです。それが、人間の人間たるゆえんのことには属するからです。でも、それが、いま、経済的豊かさの為に、その苦を見つめるのではなくて、その苦から逃れるために、欲望（食欲・性欲・優越欲）や情緒や気分を追求しています。そして、それを忘れようとしています。しかし、いちいち指摘しませんが、その歪み（病理）は社会の随所に現れているのです。

ですから、日本人が人間性（信仰）を取り戻すには、経済的な貧しさか、もしくは、もつと社会病理が進行す

るかして、人々が苦しみから逃避できない状況が出現することが、逆説的ですが、必要なように思えてしまいます。

残りの四つ「精進（勤）」と念と定と慧ですが、なじみの薄いのは、「念」です。これは、色々な意味があるのですが、基本的には対象を記憶して忘れない働きです。他の精進、定、慧は、何度も出ましたので省略します。

最後の4「五つの執着」に進みます。訳注には、次のようにあります。「貪りと怒りと迷妄と高慢と誤った見解とである。これらは執着を起こさせるもとであるから『五著』と名づける。」と。

「貪り」と「怒り」と「誤った見解」は三毒そのものです。「迷妄」は、道理に暗く、誤った考えを持つことです。また、「高慢」は、すでに出ました「慢」と同じで、高ぶって人をあなどることです。

このように「五つの束縛（『貪・瞋恚・有身見・戒禁取見・疑』）を断ち、「五つの束縛（『貪・貪・掉挙・慢・無明』）を捨て、「五つのはたらき（『信・精進（勤）・念・定・慧』）を修めたものは、「五つの執着

（『貪り・怒り・迷妄・高慢・誤った見解』）を超えて、人生の激流をこちらの岸（此岸）から、あちらの岸（彼岸）に渡った人と言えるのです。

後記

- 一、寒さがぶり返したようです。でも、畑のニラはもう芽をふいていますし、梅の花はもう散っています。それに代わって、サクランボの花が咲き始めました。もう、春はそこに来ていると感じます。
- 二、先月号で、キャベツが鳥に食べられるので、ネットを張りなおしたことをお話ししましたが、お陰で、いまはまったく被害がなくなりました。暖かくなって、ぐんぐん大きくなっています。種を一袋買ってきて、苗床で育てた苗を全て植え変えていますので、かなりたくさん採れそうです。
- 三、また、ジャガイモを先日、植えました。男爵とメークイーンを2キ^ロずつ植えています。
- 四、突然、暗い話になって恐縮です。いま、日本経済も危機的状况に陥っています。小泉総理が就任当初に言っていました「構造改革なくして景気回復なし」も、「空念仏」に終わってしまったようです。私は、はじめから、「ほら吹き純ちゃん」と言っていたのですが、まさに、構造改革も景気回復もほらだったことが明らかになって来ています。
- 五、日本の現状をよく見ないで、ただアメリカの猿まねをする以外に、なんの哲学も思想も持たない（いや、失

礼、天皇崇拜・神国日本を復活させる思想はあるのでしたか）で、構造改革をするとか、景気回復するとか言ってみても、はじめからそんなことができるわけがないことは明らかです。それをあたかもできるように大言壮語するのを「ほら」と言わずして何と云うのでしょうか。

六、私の言葉で、日本社会の特徴を一言でいえば、他己不全社会です。それは、社会を維持する働きをもった、宗教信仰、倫理道德、規則規範、伝統慣習、行動規範などを喪失した社会です。

七、イラクをめぐる国際社会の動きをみていますと、世界中が日本の後を追ってきているようです。

月刊 こころのとも 第十四巻 三月号 (通巻 一五九号)	平成十五年三月八日 〒772 8502 徳島県鳴門市鳴門町高島 鳴門教育大学 障害児教育講座気付 (ひびきのさと 沙門) 中塚 善成 <small>（よ）</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと 口座番号 01610 8 38660	

